
.hack//G.U.D.A.

蒼キ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack / G・U・D・A・

【コード】

N5026H

【作者名】

蒼キ

【あらすじ】

生まれ変わりを何度も体現する”彼”は、ふと三崎亮と名付けられる。三崎亮であるが故に死の恐怖でしかない彼のThe worldで紡がれる物語は……。原作知識なしの憑依・転生モノ、処女作です

誕生・空虚にて死に非ず（前書き）

原作を大事にしたい方は読まない方が良いかもしれません。
原作崩壊しています。

誕生・空虚にて死に非ず

ミマ 爍ア < ? ? 0 2 ? ? ? / ? ? ? ?

? ?

? ?

? ?

? ?

ノイズが奔る。

? ?

? ?

? ?

? ?

? ?

? ?

? ?

赤い線が走っている手袋と靴のメインカラーは黒。

二の腕から肘、肘から肩、両足のふくらはぎから股間接、そして腹を避けて

胸元と、マフラーを巻いたような、首輪のような処など、至るところに、べ

ルトのような黒い物でぐるぐる巻きにした華奢な背格好は強く印象を残す。

加えて、黒から覗いた腹や肩口、顔にはインクを塗ったように丁寧に色褪せ

ない赤の紋様が浮かび、頭髪は衣装と相反する針金のようであり、犬のよう

にフサフサな銀髪だ。少年の存在をより際立てている。

その様を見た者が変質者と非難しても仕方がないだろう。

そんな珍妙な格好をした少年は、少年に劣らない程度の奇抜な装飾や布地で

着飾った二人組の男女に、成人を上回るほどの大きな剣によって斬られた。

つい先ほどまで元気よく草原を走り回っていた少年が、その成長した身体で

歩む未来を根こそぎ奪われたものだから、おれはしばらく動けなかった。

それなりにショックを受けていた。

ぴんぽーん

玄関先のチャイムが鳴ったのは、俺の目の前で切り殺された少年が倒れてから一分と間もなかった。

「ピザーラ、届いたかー！」

一目散に俺は部屋を飛び出した。玄関へドタドタと駆けていくピザの精算をする頃には俺の頭は届いたピザへの欲求で一杯だった。だから右腕がオブジェみたいな変質者の語りかけには全然気付かなかった。あ、間違えた、左腕だ。

聞いてないかもしれないけど、自己紹介。

俺の名前は、今は三崎亮。

今年で、のべで百と五・六十くらいになるだろうか。

戸籍上は17歳。

高校じゃ、浮いた人間に位置してるかもしれないけど、普通である
うと心掛
けている。

あ、学年は二年。留年してないから。

え〜と、後は、座右の銘は小説の影響だけど、「急いで結婚してゆ
つくり後悔する」だ。

逆よりもショックが小さいからね（笑） あ、女の話じゃないから。

本が好きで、漫画と小説を問わず、たくさん読む。

ちよつとだけ魔法使いみたいな事が出来るのが自慢、誰も知らない
はずだ
ど。

最近ではネットサーフィンがマイブームで、その時「たまたま人気が
高いネ
トゲ、The World が稼働再開してるのを知ったんだ。

ソレは俺にとって思い深い物で、いろんな出会いがあったんだ。思
い出した
ら懐かしくなって、久しぶりに始めたんだけど・・・。

誕生・空虚にて死に非ず（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
ご注意、アドバイス等が頂けましたらありがたいです。

八カ月後・守護において殺人を躊躇わない(前書き)

ゲーム序盤のムービーとはちょっと違った戦闘です。
ストーリーは漫画版に習って進めるつもりです。

八カ月後・守護において殺人を躊躇わない

亮は窓の外に目をやった。カーテンの無いむき出しの窓から外を眺める。何の感慨も沸かず、無心に目を泳がせた。

家の間取りはすいぶん広く、普通の一軒家にしては間取りが広い住宅だ。親は大手企業に勤務しており、不自由な生活を送っていた。両親が共働きのために、一桁の年の頃はハウスキーパーが居た事もあったが、よく一人であることが多かった。

普段の立ち振る舞いから、「おれは子供ではない」という訴えがひっそりと滲み出ていたのか、幼稚園や小学校では友達は少なかったと思う。

遊ぶ人はいない、遊び道具はある、親はいない、金はある。隠居した頃を思い出した。そのときと同じ、暇をつぶすためになんでもした。

この景色もすいぶん眺めてきた。絵の具を広げてスケッチした事もあった。飽きることは無かったが、いい景色だと思ったことも無かった。

俺のことを考えていた。今が、三崎亮が終われば、どうなるのだろうか。死ねば分かるだろうが、自殺する趣味はない。

死は冬眠のようだ。季節的な低温に対して、動物が摂食や運動を中止して代謝活動を著しく低下させた状態で冬季を過ごすこと、それと似ている。

時期が来れば目覚める、俺が生まれる。

違うのは一点だけだが重要な一点だ。俺の意思は関係ない、それだけだ。

「助けてくれえ！」

突然の叫び声に驚き、我に返る。助けを求める声に対する興味を隠せず、周りに声の主を探す。

だが、ここは何処だ、俺の家だ。この家は基本的に俺を除いて無人だ。普段から家を空ける両親は全財産を常に持ち歩いているのか、一人だけの家宅捜査で判子があっても預金通帳は見つからなかった。付け加えておくと両親がセットで揃っている所も見た事がない。

よってこの家には、泥棒の被害に遭おうと盗られて困るものなんか無い。いいかげんな自己完結をする。

「なんて、言ってもらえんわい」

さっきの声の正体にはなんとなく察しが付く。どうせまたThe worldだろう。

テーブルに手を伸ばす。

イヤホンを耳に、コントローラーを手に取り、ゴーグルのような端末・FMDフェイス・マインド・ディスプレイを装着する。

この瞬間から三崎亮はPCプレイヤーキャラクターへと切り替わる。

PCの名前は、ハセヲだ。

エリアを走り回った先に、十数人ほどのPCの群れを見つけた。

分かる、狩りを彷彿とさせるひどい有様はThe worldでも珍しいことではない。何が起きているかは一目瞭然だ。

これはPKプレイヤーキラーだ。

一番手前の中から乱入することにした。

狩りだ。

地平線まで続く荒れ果てた公地、乱立した岩山の塔が織り成す干からびた荒野の丘では暴君による蹂躪が行われていた。
約十人のPK達が三人のPCを取り囲んでいる

「た、助けて下さい！」

一人が助けを乞うが、眼前ににじり寄った女はソレを聞いて笑った。

「クツクツクツク、アハハハハハハ！」

とても愉快そうに女は腹を抱えて笑っていた。

「何、歓迎してやってんだぞ？ 遠慮すんなって」

女の後ろで、緑が目立つ男が喋った。隠さない上半身には肉に骨が浮き出てガリガリの細い身体には不健康さがよく分かる。

「ようこそ！ The worldへえ！」

反対側の男が大声を上げる。

その声に応えるようにPK達は武器を掲げた。

そのPK達をみてPC達は怯えた。自分たちは狩られる、助からない！

「ふんぬ！」

先陣を切ったのは、ぷるんと膨らんだらしの無い腹を隠さない大柄の男だ。

斧のような石の塊を振りかぶった。

もう駄目だとPC達は目を瞑った。ザンっ、ザンっ、ザンっ、ドン！と生々しい音が鳴った。

斬られたと思った彼らは、体に違和感が無いことに気付いた。

そっつと注意深く目を開けて、あたりを確認すると、腹のたるんだ男に変わって黒い塊が見えた。

見慣れない物体が出現したことに呆気にとられていると、塊が動き出した。

正立したソレは人の形をしていた。

黒く、鈍い光沢を放った禍々しい殺伐とした鎧を着込んだ銀髪の人型だ。唯一の飾り気を催した首からは、ダラリと尻尾のような物がぶら下がっている。一見すると甲殻類に似ている。

百足を模したギザギザの大きな剣を携えている。

「大丈夫？誰も死んでないよね」

人型が喋った。その形容から打って変わって涼しい顔をした少年だが忽然と乱入してきた第三者の問いかけに助けられた三人のPC達は助けられられることにも気が付いていないようだった。

少年に返った言葉は息が詰まっていて判別ができなかった、どうやら吃驚して呂律が回らないらしい。

会話は出来ないだろうと思ったのか、少年は3人を守るように構え

直した。

サソリの化け物だ。

その場に居たものが全員同じことを考えていた。

これほどに狂気を彷彿とさせるPCはおるか、モンスターすら見たことが無かった。

表示されたPC名にはハセヲと記されていた。

ハセヲは呆気にとられたPK達を目配せし、周囲の状況を観察しながら腰を落とした。

まるで弓のように、腰を落とした体勢から弾けるように左方へ飛び出し、一人のPKを目掛けて剣を振り落とした。

「っだあ！」

PKが気付いたときにはハセヲが目の前に迫っており、剣で斬られた時にはハセヲのスピードにまだ驚いていた。

ハセヲが振り下ろした剣はPKを斬ったのは通過点に過ぎないと言わんばかりに大地へ衝突した。

鈍器としての性格も持ち合わせた大きな剣は、鐸を叩く槌のように大地を踏み鳴らした。

叩かれた大地から衝撃波が生まれ、隣接した3人のPK達を吹き飛ばした。

その惨状を、夢でも見ているのかと周りは錯覚していた。

そんなPK達に遠慮なくハセヲは反対側へ反復に跳んだ。

「っアあ！」

いつのまにかハセヲの手からは百足の剣は無くなっており、その代

わりといつては何だが、両手は左脇下に回され、光が迸っていた。光がはじけ、居合い切りの要領で勢い良く引き抜かれたのは刃だ。刃は大間かに立ち尽くしていたPK達を4人まとめて斬った。首を、腕を、胴を、頭を無差別に優しく、平等に斬り落とした。死神のイメージからそのまま抜け落ちたかのような、悪魔を象徴したような大きな鎌が握られていた。それが引き抜かれた刃だ。

「ウアアああああ！」

PKが一人、とうとうハセヲに襲い掛かった。

強迫により襲い掛かる敵が来るというのにハセヲは然程気にした様子もなく眺めていた。

PKは長い刀を振りかぶり、力いっぱい振りぬけばハセヲの鎌が遠くへ跳ばされた。

そこでPKは怪訝な顔をした。齒応えが違う、狙ったのはこの化け物だ、なのに自分が手にかけてしたのは鎌？

確かめるようにハセヲを見ると無傷だ。両手を隠すように、背中から洩れる光を隠すように左手を左腰に、右手を右腰に納めている。

光が弾ければ、光に弾かれたように両手を広げていた。両手に一本ずつ小振りの剣が握られている。

×の字に両手を振り下ろしたハセヲの前にはボトリボトリと四つに分けられたPKが落ちた。

「オラアアアア！」

「アアアアアアア！」

剣を振り回したPKが二人飛び出した。

ハセヲを狙って二人の剣は縦横無尽に繰り出される。声を荒げて容赦なく必死に斬りかかる彼らには冷静さの欠片もなく、しかし見苦しくも一生懸命だ。コイツを、化け物を殺さなければ俺たちが殺さ

れる！

絶え間なく繰り出される攻撃をハセヲは二つの剣ですべて捌いていた。無駄に一太刀受け止めてはもう一つの攻撃を防げない。ならばすべてやり過ぎず、といった自然で円滑な平常心だ。

痺れを切らしたのが、PKの攻撃にとうとう生まれたタメをハセヲは見逃さなかった。

その攻撃を後方にステップをとることで避け、間も空けずに再び突っ込み、彼らを駒切りにした。

圧倒的な強さだ。

この広い地平線の彼方まで見渡せる丘の上で行われた狩人とその獲物による小さな饗宴。

全員で二十人以下の少なくとも、死と悦楽の二択に別けられた噴火したマグマのような興奮が一気に冷め切った。

そこにいるすべての役者の一縷の期待と驚嘆、死の恐怖を乗せた形容し難い視線が今、たった独りのPCに注がれていた。

ソレが三崎亮のPCだった。

八カ月後・守護において殺人を躊躇わない(後書き)

読みづらくはなかったでしょうが、不安です。

ダメダメ作者ですが、性格の違うハセヲで頑張りたいです。

閑談・後の運命（前書き）

久しぶりの投稿です。

ミスなどがあるかもしれないので、書き直すつもりです。
改めて、原作を大事にしたい方は、ご注意ください。

閑談・後の運命

「て、なんだ。ボルドーじゃん」

強大な力による一方的な暴行を行使した当人であるハセヲは、今殺そうとした相手が知人だと気付いたらしい。とても気楽な会話は出来ないだろうが、気にした様子もなく涼しい挨拶を送る。

「あア！？」

ボルドーと呼ばれた女性型PKから放たれた大声にハセヲは顔を顰める。

耳を、痛そうに抑えるハセヲの、そのPCの蛇足ともいえるだろう行動は、あまりに人間らしい。

端末を着けている亮も同じように耳を抑えていた。

「つてメエまた、またか！！ ハセヲ、いつもいつも邪魔してんじやねえよ！！」

邪魔ってなんだよ、と怪訝そうに質問するハセヲに文句を必死にぶつけるボルドーの、その口から次々と罵声が飛び出してくる。

どうみても恐怖を隠した虚勢にしか見えなかった。

それを煩わしくも聞き流していたハセヲだが、ふと呆れたように溜め息を吐いてめんどくさそうに鎌を掲げる。

その様を見たボルドーは怯えを臆面なくさらけ出してハセヲから離れようとする。

腰が抜けたのか、手足をシャカシャカと動かして後退するボルドーを見て、本当に良く出来ているなあ、と心の中でこのThe ネットゲ wo

r l dに感心する。

(なんか、アメンボみたいだな)

こんな不恰好なアメンボはいないだろう、と自分の発想に対抗して笑いを堪えようと我慢しながらもボルドーを殺すための鎌を振り落とそうと思ったところで、彼女なら知ってるかもしれない、と思いついた。

「あ、クーン知らない？」

クーンとはハセヲのThe worldにおける友達である。

先日から頻繁にメールを送りつける彼のメールが急に途絶えたのだ。その時は途絶えた事に疑問など持たず、やっと止まったか、と安心していたのだが、此方からメールしても返信が来ないので。

クーンのプレイヤーはフリーターで食っているらしいので、リアル現実がバイトで多忙ならば仕方ないが、それにしたって日が開きすぎている。

軽い性格でも、意外と律儀な彼にしては珍しかった。もしかしたら初めてかもしれない。

「んあ！？お、おう。副団長さまか！知ってる知ってるぜ！！」

慌てて返事するボルドーに軽く驚いた。

ここで副団長と呼ばれているのは無論、クーンの事である。

今は退団したが、あるギルドの副長を務めていたことから、彼女はクーンのことを副団長と罵るように呼ぶのだ。

「あ、そう？」

「おつおつ！おつ！」

妙に囁し立てるなあ、と訝しむハセヲにボルドーは何を思ったのか、後ろを向くようにハセヲに指示する。

後ろを向く必要性が全く感じられないハセヲは当然ボルドーに何故かと質問する。

「ああ！？副団長サマの事知りてえんだろうが！？ごちゃごちゃ言つてねえで早くしろ！！」

ひい、と怖がるハセヲは結局後ろを向かされた。

こうやって無理やり押し切られれば、なんとなく逆らえないのはハセヲの悪い癖である。

こんなことをさせるボルドーを見て正直に、コイツ絶対知らないな、と確信にも似た悪態をついたハセヲは、どうしてやるうか、と困ったように溜め息を吐く。

（ほら、大地を蹴る音がする。ゲームなのに本物みたいによく出てくる音だな。）

「ッ後ろ！」

守ったPC達から1人分の声が拳がる。

彼女がこのまま俺を攻撃しても俺を殺すだけの威力は無いだろう、それでも彼女がハセヲを騙したのは一矢報いるためなのだ。

それを理解していたのか、それとも声に反応したのかハセヲは攻撃を捌き、すかさずカウンターを見舞い、その一撃の下にボルドーは死んだ。

どんな事をしてやるうかと悩んでいたハセヲだが、どうしようもなにも殺すことしか答えは出てこなかったのだ。

「あ、クーンの事知ってたら今度教えてくれ！」

正直、彼女がボルドーの事を知ってる気は微塵にも抱いていないのだが、もし本当に知っていたら、もし彼女が知る事になったらと思いついたハセヲは叫んだ。

（でも、プレイヤーに届いても、知ってても教えてくれないだろうな）

戦闘が終了し、派手なエフェクトに包まれて鎌が消える。

より細かく説明するならば、鎌がほんのりと発光しだし、蛍火のような光につつまれて、風景に溶け込むように消え去った。綺麗だ、といつでも亮は思う。

手持ち無沙汰になったハセヲは手を腰に置き、哀愁を込めて溜め息を吐く。

そこで、先程まで殺したPKたちに襲われていたPC達のことを思い出す。あつ、と声が出た。

ハセヲ自身が救ったのだが、そのことを理解してるようには思えない狼狽だ。

「え、とつ、大丈夫ですか？」

ゲームである事にもかかわらず、その様は本当に心から他人を心配するような、滑稽な生々しさが態度から感じられた。

PCを通せば分かる、プレイヤーが本当に心配してくれてるのだ、そう少女は確信めいたらしく直感した。

彼女は目の前の、悪意の塊のような少年との会話を試みた。

無意識の下で、彼のことを知りたがったのだ。

「はい、助けて頂いてありがとうございます」

返ってきたPCの音声と、スラスラと述べられた丁寧な感謝の言葉に、亮は緊張を覚えた。

目の前、というよりはFMDを通して見える、対面するそのPCは、それは可愛らしい、白い素肌な少女を模したPCだった。

緑色のキャミソールのような服と、頭に被る”つば”のない大きな帽子、そしてそこから控えめに覗く金髪のせいで随分と目立つPCだ、と亮は思った。

「い、いえ、気にしないでください。あ、HPの回復しておきましようか？」

礼儀正しい少女にうるたえているが、内心ではその礼儀正さに感心している亮は、自分も粗相のないように、と言葉使いに気をつけながら少女を気遣う。

しかし、あまり亮はあまり敬語を使い慣れていないようだ。

少女にハセヲの注目が集中する。カーソルにはPC名が映る。

少女のPCはアトリ、というようだ。

「ありがとうございます。しかしそこまで・・・」

そこから互いに、遠慮を交じえながらも、悠長な会話が展開された。二人の会話はドギマギとしていて、もはや二人だけの空間と言っても過言ではない。

二人を茶化すようならば、其処はお見合いという冗談が似合うだろう。

どうやらPC・アトリは、自分と共に行動していた二人のPCを忘れていたようだ。

二人のPCは、二人には見えていないようで、完全にほったらかしにされている。

だが二人は不服という訳ではない。

目の前の二人が自分たちを忘れている事などはどうでもいいのだ。

先程の戦闘において、PKの群れを蹂躪したハセヲに対する恐怖が身を支配しているのだ。

結果として助けてもらったことの感謝もあるが、しかし恐怖心が大きい。

ハセヲの禍々しい姿も大きな要因だ。

初めて観るハセヲというPCの服装は、他のPCに類をまつたくな^く、ダークなイメージという点でも、明らかに抜きん出ている、本当に唯一無二の悪の象徴だったのだ。

そんなデザインのPCが、善いPCな筈がない。

助けてくれるなどもつてのほかだ。

アレは、大体の場に居るだろう、相容れない悪だ。

関わりたくない、近づきたくない。そんな、恐怖を抱いていた。

「あ、それなら、二人を治してもらえませんか」

アトリが二人に注目する。続いて、当然ハセヲも注目する。

二人はより怯えた。PC二人がビク、と震え上がる。

その様子が、アトリには分からなかった。隣のハセヲも続いて首を傾げる。

そして、一瞬で見当が亮には付いていた。

二人は勇気をふりしぼる。常識と良心をふりしぼる。

世話になった以上、二人がそのPCひとに対する礼でもあった。

「ア、アトリ・・・」

二人の声がシンクロして、そしてそれ以上は言葉が出なかった。そこまでだった。

悟ったような笑いを浮かべるハセヲを見て、固まってしまった。

何故、アトリはこんな怪物にも普通なんだ？

二人には分からなかった。

「あー、俺もう行きますね」

困ったように笑うハセヲはそういって、それにアトリは驚いた。

アトリは悲しそうな顔色だった。

アトリのプレイヤーは見捨てられた子供のような顔を浮かべていた。ハセヲは急ぐように小走りで離れていた。

待ってください！！、と叫ぶアトリの声に、こんな声出るんだ、とハセヲは驚きで足を止めた。

待てと言われたので、はい？、ハセヲは振り向く。

「だから、どうしてあのPC達を殺キルしたのですか？」

大声で出た疑問は、先程ハセヲがアトリと二人で話していたときにハセヲを困らせた疑問だった。

ハセヲとしては有耶無耶で誤魔化したかったのだが、それは出来ないようだ。

ハセヲほどの強さなら、別に殺さなくてもすむだろう、という彼女の言い分に、ハセヲは返答に困ったからだ。

何故と問われても、ハセヲの答えは、彼女に忌避されると思ったからだ。

肝の小さいハセヲには、赤の他人とはいえ、ソレは苦しかった。

結局笑って誤魔化して逃げた。

「あゝ、疲れた」

身体を伸ばし、亮はゲームを切った。

閑談・後の運命（後書き）

小物っぽいハセヲでした

ギルド・マスターハセラ（前書き）

のろい投稿にしてはあまり物語は進んでいません。

ギルド・マスターハセヲ

「The World」には複数の並列するサーバが設けられており、ユーザはそのサーバ間を自由に行き来することで、冒険の準備としての機能を娯楽のように堪能する。

サーバーにはそれぞれルートタウンが存在し、ログイン時やワールドから戻った際には必ずルートタウンに転送される。

ダンジョンへの冒険から、冒険の準備として利用されるショップ、また、ユウザー同士の出会いの憩いの場として、ルートタウンは活用される。

ダンジョンとは違ってモンスターの存在が無いため、武器の機能は悪魔でも装飾品や展示物、見せるだけといった扱いとなる。

ルートタウンは、初心者から熟練者までの当然のサービスなので、熟練プレイヤーにとって説明を試みれば逆に難しく感じる。

やはり一言で片付けるなら全PCに平等だという事だ。

そのルートタウンこそが、ハセヲにとって最も面倒な世界である。ある意味では、モンスターが跋扈するフィールドよりもだ。

理由は、ハセヲ以外にもあてはまるが、プレイ時間が720時間を超えたら、こじんまりとだがPCの情報が流れるのである。

それは個人情報といった、ユウザーへのプライバシーという意味ではなく、「The World」という一つの世界での有力な人物、といった紹介のようなものだ。PC画像が出る事も^{にんげん}ある。

これだけなら別にルートタウンを従来しただけで、何百とPCが移動する”街”で注目を引く事はない。The worldの御用達の掲示板にPC名が有力プレイヤーの情報と共に画像が貼り付けられれば、気の小さいユウザーが気にする事もあるが時間が解決してくれる程度だ。まだ他にも理由はあるのだが。

その気の小さいユウザーに三崎亮^{ハセヲ}があてはまるのだ。ソレが無くても、ハセヲのPCは目立つので亮には架空に成り下がった視線が

くすぐつたい。目立つ理由は一目瞭然だろう。

「そんな事気にしてたら、身が持たないよ。ハセヲ」

鎧姿のまま、ぐつたりと座椅子にのしかかるハセヲを笑うのは、文様の奔る緑藻の衣服を着こなした人物。無論PCだ。PC名をシラバスという。男性型だが茶色の細長いポニーテールがよく似合い、特徴的でもある。

彼の隣に立つぬいぐるみ、ではなく小さくてポツチャリした獣人型PCも一緒に笑っている。PC名はガスパー。ゆつたりしたイメージが似合う男性型PCで、言動もイメージ通りのPCだ。

「うっさいな……。こんな格好だぞ？俺はハリネズミかつつの」

拗ねたように呟く鎧姿の少年とは実に不気味だ。その似合わなさがシラバスとガスパーにとっての笑いのツボを刺激しているのか、二人はにやにや笑っている。

「ハリネズミね〜？」

「ハセヲにハリネズミの可愛さは全然ないぞお〜」

神経を逆なでしてくれる言いようにハセヲは溜め息を吐くが、この雰囲気は三人には悪くない。

後者の間延びした喋り方をするのはガスパーである。彼の喋り方は特別ハセヲを挑発した訳ではなく、普段から常用しているだけだ。彼に悪戯心が無いとは言い切れないが。

三人が居るのは、ハセヲが長を務めるギルド「カナード」のルームだ。雑貨類のテクスチャが散りばめられているが、初期のルームそのままの風景だ。このルームが三人の溜まり場だが、鍛冶やシヨ

ツプ程度のギルド特典を活用しても、ルームカスタマイズはおざなりとなっているようだ。

「だっつ、もうショップに出るぞ。今日行くんだろ？」

強引に会話を切り、せかすように諭すハセヲに「はい」と揃って良い返事をするので三人はルームを出た。といっても、ハセヲ本人がショップで店番を務めたこと自体はもう過去のものとなり、今ではガスパーが精力を尽くしているのが現状であり、三人でギルドショップが立ち並ぶ広場へ向かうのは、当期の業績の総計を取るためだ。

無駄に24時間営業を張っているので自動販売システムオートに任せることも彼らには当然なので、店を構えるにはどこか怠情的でも、こういった業務は現実の会社を真似たごっこ遊びの面白さも含んでいる。

ところで、ワープを利用すれば、彼らの居るルートタウン「マク・アヌ」の点々へと跳べるのだが、人通りのある路地をわざわざ利用しようと推す、ある二名にはどうでもいい。うきつきと歩く二人の軽装PCと沈んでいる一人の重装備PCとは異様な光景である。周囲の珍品を見るような目線を引いている。

そんな時に短いポップなメロディがハセヲから鳴った。

「メール？」

「ん」

The world利用者に経営会社に取り持つ特典の一つに、PCのメンバーアドレスを通してのメール機能がある。ゲームを起動していても利用できるのは好評で、こういった小さな事からも利用者のために尽くすのは立派だと亮には判る。

ハセヲから声がこぼれた。

「なんだあ？」

「いや、懐かしい奴から、今から会おうって」

「じゃあ行っちゃおうの？」

「終わってから行くって返しとく。急がせてくれ」

会話の途中から広場に着いていた三人は駆け足で自分たちの屋台に向かう。

早々にギルドの証明を済ませて会計をこなす三人に歩み寄る一人の男がいた。

アトリが険しい顔をしてその男に続いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5026h/>

.hack//G.U.D.A.

2010年10月8日12時29分発行